バリ島における観光開発が伝統社会におよぼす影響に関する考察

足　立　浩　一*

概要

地上の楽園と呼ばれるバリ島には海外・国内から毎年多くの観光客が訪れている。バリ島の魅力は典型的なリゾートのイメージだけではなく、ヒンドゥー教に根ざした伝統文化にあり、多くの人々が「神々の住む島」バリに魅了される。観光開発が進む中で、バリ島は環境問題等多くの問題を抱えながらも、バリの人々は「世界的観光地バリ」を誇りにし、観光と伝統文化は相互の発展に寄与しあっている。本稿では観光開発がバリ社会にどのような影響を与えているのか、バリの人々の伝統文化や社会慣習に対する意識はどのように変化しているのかを調査・分析している。

キーワード：観光開発、バリ・ヒンドゥー、伝統芸能、観光資源、バンジャール（banjar）、アダット（adat）、スカ（seka）

1. 問題の所在

インドネシアのバリ島は、東南アジア有数の観光地として知られている。「神々の住む島」、「最後の楽園」などと称され、その多様な観光資源は、世界中からやってくる観光客を魅了している。

オランダによる植民地時代、1920年代にバリ島の観光ははじまった。無抵抗な人々を圧倒的な武力を持って鎮圧したオランダは、世界中から非難を浴びることになる。こうした非難を和らげるため、また、植民統治の正当性を確保するために、オランダはバリ島の伝統文化を保全する政策をとった。[1]Vickers（1989）は、楽園バリのイメージは、オランダ植民地政府の観光地としてのバリ島の宣伝のために創出されたとしている。

一方、バリ島の伝統芸能は、島内にとどまることなく、世界に紹介され、称賛されることになった。1931年のパリ植民地万国博覧会では、プリアタン村の舞踊団グヌン・サリがバリの舞踊団として初めて海外公演を行った。同じく、プリアタン村のティルタ・サリも日本を含む海外公演を積極的に行った。これらをきっかけにしてバリ舞踊とガムランの素晴らしさが世界中に知られる

---

* 福山大学経済学部国際経済学科 adachi@fuec.fukuyama-u.ac.jp

1 ブレレン王国、バドゥン王国、クルンクン王国の王族たちは、ププタン（Puputan）により全員殉死し、オランダ軍はバリ島全土を支配下に置いた。

ようになった。

1930年代のバリ島内においては、画家のウォルター・シュピース（Walter Spies）やルドルフ・ボネ（Rudolf Bonnet）など多くの西洋の芸術家たちがウブドに住みついた。オランダ植民地政府の文化保護政策とバリ島内の芸術家と西洋の芸術家の遭遇によりウブド・スタイルという新しい芸術スタイルが生まれた。この新しい波はバリ・ルネッサンスと呼ばれている。

このようにバリ島の伝統文化が世界中に知られるようになり、バリ島内ではバリ島の伝統的芸術と西洋の芸術が出会うことによって、伝統文化は一段と活性化され、新しい文化が生み出された。玉置（2001）は、バリ島やオセアニアの島々は、既存の文化や社会そのものを「パラダイス（楽園）」とみなして観光の対象としているが、歴史上パラダイスとされる土地は限られており、バリ島はその稀有な存在である、と述べている。

植民地化や観光開発は、時として伝統文化を破壊することがある。マッキーン（1991）によると、観光は変化をもたらし、この変化は優越する文化が、弱体な受け身の文化を侵略・破壊し、均質な文化へと俗化させてしまう、としている。いわゆるバリ島のワイキキ化である。しかし、このバリ島の人々は好むと好まざるとにかかわらず、近代化を盲目的に受け入れてしまうという仮説は正しくない。伝統文化は新しい風が吹き込まれて、より高度な文化へと進化していくのだ。

山下（1996）はバリ島の観光開発は、伝統文化を破壊することなく、むしろ伝統文化の再構築に貢献した例だと述べている。そうした観点から、バリ島の民族芸能は新しく作り出された伝統であり、観光開発のなかで伝統文化、ことに伝統芸能は保存されてきたというマッキーンの論を紹介している。また、観光用に演出されたバリ文化は、観光用の舞踊が観光客に供されるばかりでなく、寺院儀礼に奉納されているように、バリ島の人々自身にもフィードバックしているとした。

このようにバリ島の伝統文化芸術は、シュピースらのもたらした西洋芸術と出会うことにより創造され、伝統舞踊や音楽は観光客用のビジネスとして洗練されたものに変化したり、新たに創作されたりした。そうした過程のなかで、バリ島の伝統文化は、より豊かなものになり、観光客を惹きつけてきたのだ。

山下の研究をはじめとして、バリ島の観光については、これまで人類学的な観点から多くの研究がなされてきた。これらの研究の成果から、バリ島における観光産業の発展は、バリ島の伝統芸能を保存するだけでなく、発展させ、また、新たな文化や芸術を創造してきたことが明らかにされてきた。こうした伝統芸能がはたしてどれほどバリ島への観光誘因になっているのか、また、観光開発がバリ社会にどのような影響を与えているのか、バリ島の人々の伝統文化や社会的慣習に対する意識はどのように変化しているのかを分析するのが本稿の課題である。

2. バリ島経済と観光産業

バリ島へのパッケージツアーのパンフレットや旅行ガイドブックには、他の楽園と呼ばれるリゾートのように青い海、白い砂のビーチのみならず、ライステラス（棚田）、ヒンドゥー寺院などの風景に加えて、サーフィンやダイビングをする若者、伝統的な衣装に身を包んだ踊り子や神秘的な宗教行事など、多様なバリ島のイメージが紹介され、観光客を魅了している。バリ島経済における観光産業の比重は、年々大きくなるばかりである。

バリ島はインドネシアの１万８千以上ある島々の一つであり、面積は 5,632.86km、人口は約 405 万人（2013 年現在）である。バリ島の人口は、他地域からの移入が増加しており、2010 年には移入者数が 406,921 人、移出者数が 269,245 人と大きく入超となっている。失業率が 1.79％（2013 年８月）とインドネシアで最も低いバリ島に仕事を求めてジャワなどから移入するケースが多い。[2]バリ島の 2013 年度の GRDP（Gross Regional Domestic product）は、94 兆 5,557 億ルピアで、そのうち観光関連産業（PHR セクター）[3]の占める割合は、29.89％と最大であり、2 番目に大きな割合を占めるのは、農業セクターの 16.82％である。観光関連産業の占める割合を、労働人口で見ると、全労働人口 307.3 万人中 62 万９千人と 27.64％で、農業セクターの 24.00％を上回っている。バリ州統計局によれば、2003 年から 2013 年の 10 年間に、バリ島の農家は 83,494 世帯減少している。

バリ島経済は、観光産業により潤っているように思われるが、2013 年度の一人当たり GRDP は約 1,903US$ にすぎず、インドネシア全体の一人当たり GDP 値 3,510US$ に比べかなり低い。[4] 南部の観光地とそれ以外の地域の所得格差は大きく、減少はしているものの、いわゆる貧困層も存在している。

一方、土地利用に関しては、2013 年現在、農業用地が 355,568 ヘクタール、非農業用地は 208,098 ヘクタールであり、農業用地はホテル建設など、商業用地や住宅用地に転用されており、バリ島の中心地であるデンパサール地区では、毎年 20 ～ 30 ヘクタールの農地が失われている。[5]

バリ島は稲作が盛んな地域であり、ライステラス（棚田）は、その美しい景観から世界遺産にも登録されるなど、重要な観光資源にもなっている。観光客誘致のためのホテル等建設のために、貴重な観光資源が失われるのは皮肉な結果である。

バリ島の観光開発は、オランダ植民地時代の 1924 年、王立定期船運航会社（KPM）の蒸気船がバリに航行するようになったころから始まった。1928 年にはバリ・ホテルがデンパサールで開業した。インドネシア独立後は、1960 年代半ばのバリ・ビーチホテルの開業とグラ・ライ（Ngurah

---

[2] インドネシアの失業率（2013 年８月）は 6.25％

[3] バリ州統計局の定義によれば、PHR セクターとは、商業、ホテル、レストランの３つの分野を言う。

[4] バリ州の GRDP は 1Rp ＝ 0.000083US$ で換算

[5] "High time to look beyond Bali for tourism opportunities" The Jakarta Post, September 28, 2013

Rai）国際空港の開設により環境が整備され、1972年のスハルト大統領時代の大統領令により、観光業はバリ州の経済最優先事項となり、観光開発が本格化した。1973年以降、重点的に開発されたのは南部のヌサ・ドゥア（Nusa Dua）地域で、高級リゾートホテルが次々と建設された。[6]

以降、バリ島は順調に外国人観光客を誘致してきた。1992年には日本人観光客が第1位を占めるようになったが、1995年2月の日本人観光客の集団コレラにより、1995年から1998年までオーストラリアに譲ることになった。1994年にはバリ島を訪れる外国人観光客は100万人を突破した。2002年10月と2005年12月のバリ島随一の繁華街クタでの爆弾テロ事件により、2003年と2006年には一時観光客数は大きく減少したものの、図表1が示すように、2009年には200万人、2013年には300万人を突破した。

図表1　バリ島への直航外国人観光客数の推移

単位：人

年	観光客数	増減
2003	993,185	—
2004	1,458,309	46.8%
2005	1,386,449	-4.93%
2006	1,260,317	-9.10%
2007	1,664,854	32.10%
2008	1,968,892	6.52%
2009	2,229,945	13.26%
2010	2,493,058	11.80%
2011	2,756,579	10.58%
2012	2,892,019	4.91%
2013	3,278,598	13.37%

出典）Bali Dalam Angka 2014

また、図表2のバリ島への国別直航外国人観光客数の推移をみてもわかるように、日本人観光客のシェアは減少しており、オーストラリア人観光客が最大のシェアを占めている。また、インドネシアのビザが取得しやすいことから、中国人観光客が増加しており、2011年からは日本を抜いて第2位のシェアを占めるようになった。2013年は前年度に比べ、台湾からの旅行者は26.9%、中国22.2%、シンガポール18.0%、マレーシア17.5%、日本10.3%などいずれも大きく増加した。オーストラリア人観光客やヨーロッパからの観光客は長期滞在型が多く、ロスメン

[6] 間苧谷榮「バリにおける観光業と伝統的舞踊」亜細亜大学国際関係紀要、PP74-77

などの安宿に滞在ケースが多い。日本人観光客に関しても、パッケージツアーを利用しない多様化した個人旅行者が増加しており、限られた予算で自由に旅行を楽しむ観光客が多い。2013 年の星付きホテルの平均宿泊日数は 3.30 日と前年の 3.56 日に比べ減少している。そうした中で、中国人観光客の団体旅行で高級リゾートに滞在する旅行形態はバリ島にとって優良な顧客である。

インドネシアの経済成長に伴い、国内旅行者も近年急増している。2004 年には 2,038 千人であった国内旅行者は、2013 年には 6,977 千人と約 2.4 倍に増加している。

図表 2　バリ島への国別直航外国人観光客数の推移（1 － 12 月）単位：人

年	第 1 位	第 2 位	第 3 位	第 4 位	第 5 位
2003	日本 185,751	台湾 170,533	豪州 139,018	ドイツ 53,374	イギリス 50,043
2004	日本 326,397	豪州 267,520	台湾 183,624	韓国 80,273	ドイツ 70,050
2005	日本 310139	豪州 249,001	台湾 128,194	韓国 78,146	イギリス 75,845
2006	日本 255,767	台湾 141,979	豪州 132,236	韓国 89,911	マレーシア 72,724
2007	日本 351,604	豪州 204,421	台湾 138,842	韓国 134,454	マレーシア 104,949
2008	日本 354,817	豪州 308,698	韓国 132,559	マレーシア 129,669	台湾 129,176
2009	豪州 446,042	日本 319,4735	中国 199,538	マレーシア 132,835	韓国 123,879
2010	豪州 647,872	日本 246,465	中国 196,863	マレーシア 155,239	韓国 124,964
2011	豪州 790,965	中国 236,868	日本 183,284	マレーシア 169,719	台湾 129,233
2012	豪州 823,821	中国 310,904	日本 191,836	シンガポール 179,947	マレーシア 120,982
2013	豪州 826,385	中国 387,533	日本 208,115	マレーシア 199,232	シンガポール 138,388

出典）Bali Dalam Angka 2010-2014

バリ島における観光開発と観光産業の発展は、かつて最も貧しい地域であったバリ島から極端な貧困者を減らすことに成功した。先述のようにバリ州の失業率は、インドネシアの各州の中で一番低い。観光産業はバリ人に多くの就業機会を与えていることは間違いない。2013 年には新空港が開業し、ヌサ・ドゥア、南デンパサール、グラ・ライ国際空港を結ぶ有料道路が開通するなど、

インフラも整備されている。[7]

一方で、観光開発はバリ島の社会にとってネガティブな側面も併せ持つ。ホテル建設や宅地転用のために農地が失われ、貴重な観光資源である農地が年々減少している。現在、バリ島のホテル客室供給は、需要を上回っている。2015年には38,000室が必要になると見積もられていたが、2005年後半にはすでにその数を達成している。また、観光バスやバン、レンタカーなども過剰な状況にあり、島内の渋滞の原因の一つとなっている。[8]

そして、観光地化が進むことによって、バリの伝統的習慣や生活様式が薄れていくのではないかという懸念もある。

3. バリ島の社会と伝統芸能

バリ島の伝統芸能は、ヒンドゥー教の寺院奉納の儀式から生まれたものである。全人口の88.1％をイスラム教徒が占めるインドネシアは、世界最大のイスラム教国である。一方、バリ島はバリ・ヒンドゥーと呼ばれるヒンドゥー教徒が90％以上を占めている。

行政上の地域区分、宗教、そして民族の領域がほぼ重なり合う、インドネシアでは珍しい同質性の高い社会である。[9]しかし、観光産業の振興により、他地域からの移住者が増加し、宗教をはじめ価値観の多様化が進みつつあり、移住者による犯罪の増加等、社会に軋轢が生じるケースも生じている。バリ島においては、バリ人同士の場合、バリ語で会話をし、バリ人以外と会話する場合にはインドネシア語が用いられている。

バリ島の社会は、寺院を中心とした慣習村（desa adat）、基本的な地域政治単位のバンジャール（banjar）、農地の所有や管理に携わる水利組織スバック（subak）、父系的に継承した社会的地位カースト（kasta）、[10]伝統芸能集団のように特定の目的のために任意に結成されるスカ（Seka）と呼ばれる集団、行政村（desa）といった7つの社会組織が複雑に絡み合って成り立っている。[11]

バリ島の人々は、こうした複雑な人間関係に基づいて、寺院の儀礼に参加したり、バンジャールでの役割を果たしたり、スバックで定められたルールに従って、協力し合って農作業を行う。こうした社会組織の中で自分勝手な行動をすれば、村八分となり、バリ社会で暮らしていくことはできないであろう。バリ人の日常生活の規範となっているのは、アダット（adat）と呼ばれる慣習である。子どものころから親に連れられて寺院の儀礼に参加し、大学生になってもバイクに乗り、スマートフォンを片手に儀礼に参加する。現在でも学校の課外活動で、週に数日伝統芸能の練習をしている。

7　2014年4月11日より正式名称はイ・グスティ・ングラ・ライ国際空港に変更された

8　"Bali has too many hotel rooms" The Jakarta Post, August 27, 2010

9　佐伯奈津子他(2013)『現代インドネシアを知るための60章』明石書店、P169

10　バリ島のカーストには、ブラーフマナ、サトリア、ウェイシャ、スードラの4階級

11　間苧谷榮「バリ島における観光業と寺院システム」亜細亜大学国際関係紀要、P57

伝統芸能は芸能スカ（Seka）[12] により継承されている。芸能スカには海外公演を行うようなものから、地域の寺院の儀礼のみにパフォーマンスを行うものまで、様々な規模のものがある。

バリ島の伝統舞踊は、宗教的な重要性に応じて、ワリ、ブバリ、バリバリアンの 3 段階に区分される。ワリは、寺院で儀式として奉納される神聖な舞台芸術であり、ブバリは、寺院で儀式として奉納されるが、人前で観賞用に演じられることもある。バリバリアンは、娯楽として人前で観賞用に演じられる舞台芸術であり、観光客に演じられるレゴン、バロン、ケチャなどのなじみ深いダンスは、バリバリアンに区分される。

プリアタン村のグヌン・サリのパリ植民地万国博覧会での公演の成功、次いでティルタ・サリの海外公演の成功により、バリ島の伝統芸能は世界的な評価を得ることになった。海外公演に参加した団員と参加できなかった団員との間には、また、海外公演を行ったスカとその他のスカの間では、経済的な格差が生じ、バリ島の伝統社会に軋轢が生じた。一方で、これらの海外公演で得た名声により、バリ島の伝統芸能は、寺院行事のための儀礼から大きな観光資源へと変化したのである。

例えば先述の日本人観光客に人気のティルタ・サリは、プリアタン村のバレルンステージを常設し、毎週金曜日の夜 7 時半から定期公演を行っている。公演はレゴンダンスとバロンダンスからなり、美しいガムランの音色と完成されたダンスパフォーマンスで観客を魅了する。2013 年 4 月現在、ウブドとウブド近郊のプリアタン村では、24 のスカが 29 の常設公演を行い、多くの観光客を集めている。

本来宗教的な儀礼芸能であったものが、観光客用のショーとしての要素が強くなり、本来の姿を失う懸念やビジネスとしての伝統芸能の在り方に批判も多い。しかし、観光用のプログラムにより、伝統芸能が変化と進化を遂げ、進化したパフォーマンスが寺院行事での儀礼にも還元されている。バリ島の伝統文化は更新され、活性化されているのである。

4. バリ人の観光と伝統文化に関する意識調査

平成 26 年 8 月 26 日から 8 月 31 日まで、バリ島サヌール地区およびデンパサール地区において、質問紙による調査を実施した。対象としたのはバリ島で生まれ育ったいわゆるバリ人のみである。質問紙は、「バリ島の観光地としての魅力について」、「観光開発の影響について」、「観光開発と伝統文化について」の 3 セクション、合計 39 問の質問からなる。回収できたのは 44 件であった。

4.1 バリ島の観光地としての魅力要因

図表 3 は 2013 年のバリ島観光人気スポットランキングである。上位 10 件のうち、ビンドゥー

[12] スカとは限定された目的ごとに構成される社会集団のことをいう

寺院や遺跡が7件を占めている。バリ島は「南の島」「楽園」「ビーチリゾート」といった一般的なイメージがあるが、加えて「美しい自然」「神々の住む島」「多様な伝統文化」「芸術の島」「癒しとリラクゼーション」「オーガニック」など多様なイメージが、世界中の観光客を魅了している。「白い砂浜」と「青い海」だけのリゾートとは異なり、多くの観光資源を有している。

図表3　観光客に人気の観光スポット Top10（2013年）

順位	観光スポット	訪問者数
1	TANAH LOT タナロット寺院	3,045,688
2	ULUWATU ウルワツ寺院	820,999
3	ULUN DANU BERATAN ウルン・ダヌ・ブラタン寺院	724,065
4	BEDUGUL ブドゥグル（ブラタン湖／ウルンダヌ寺院）	519,528
5	PENELOKAN BATUR プヌロカン（バトゥール湖）	509,983
6	TIRTA EMPUL TAMPAK SIRING ティルタウンプル寺院	445,502
7	KEBUN RAYA EKA KARYA バリ植物園	340,105
8	TAMAN AYUN タマンアユン寺院	281,901
9	GOA GAJAH ゴア・ガジャ遺跡	253,455
10	BALI SAFARI & MARINE PARK バリサファリ＆マリンパーク	208,444

出典）Bali Government Tourism Office 資料より作成

今回の調査では、はじめに「バリ島の観光地としての魅力について」質問した。バリ人自身は、バリ島の観光地としての魅力をどのように考えているのか、また、一般的な外国人観光客との価値観の違いを考察するのが目的である。調査では想定される魅力を提示し、それぞれについて、強い、やや強い、どちらともいえない、やや弱い、弱い、の5段階評価をしてもらった。[13]

「バリ島の観光地としての魅力」は、国内旅行会社のツアーパンフレット、「るるぶ」やLonely Planetなどの旅行専門雑誌を参考に、図表4に掲げる15項目を抽出した。

アンケート調査の結果、強いまたはやや強いとの回答が多かったのは、「美しい自然・風景を楽しむ」（97.7％）、「バリ島の人々のやさしさ・暖かさとのふれあい」（97.7％）、「スパ・マッサージなどでリラックスする」（95.5％）、「伝統的な舞踊・音楽などを鑑賞する」（95.5％）、「サーフィン・ダイビングなどのマリンスポーツ」（93.2％）であった。一方、強いまたはやや強いとの回答が少ないのは、「クラブ・バーなどのナイトライフを楽しむ」（59.1％）、「エコツアーなど環境学習へ

[13] 以下、第2セクション、第3セクションとも同様の方法で評価してもらった。

の参加」(70.5%)、「サファリパークなどのテーマパークを訪れる」(75.0%)、「寺院や遺跡など歴史的建造物の鑑賞」(77.3%)、「食事を楽しむ」(77.3%)、「ヒンドゥー教行事への参加」(79.6%)という結果となった。

図表4　バリ島の観光地としての魅力

	項目
1	美しい自然・風景を楽しむ
2	バリ島の人々のやさしさ・暖かさとのふれあい
3	寺院や遺跡など歴史的建造物の鑑賞
4	サーフィン・ダイビングなどのマリンスポーツ
5	スパ・マッサージなどでリラックスする
6	伝統的な舞踊・音楽などを鑑賞する
7	買い物を楽しむ
8	食事を楽しむ
9	リゾートでのんびりする
10	博物館・美術館などを訪れる
11	バリの伝統的な暮らしを体験する
12	クラブ・バーなどのナイトライフを楽しむ
13	サファリパークなどのテーマパークを訪れる
14	エコツアーなど環境学習への参加
15	ヒンドゥー教行事への参加

出典）アンケート調査より作成

図表3とアンケート調査の結果を比較すると、外国人観光客に人気のある「寺院や遺跡など歴史的建造物の鑑賞」、「ヒンドゥー教行事への参加」や「サファリパークなどのテーマパークを訪れる」といった項目について、バリ人はあまり優位性を感じていないことがわかる。一方、一般的に日本人がバリ島のパッケージツアーのパンフレットで目にする典型的なイメージである、「美しい自然・風景を楽しむ」、「スパ・マッサージなどでリラックスする」、「伝統的な舞踊・音楽などを鑑賞する」、「サーフィン・ダイビングなどのマリンスポーツ」といった項目にバリ島の競争優位を感じていることは興味深い。日本人観光客も従来に比べ、パッケージツアーは減少及び小型化し、個人旅行も増加している。典型的なマスツーリズムの時代から、価値観が多様化しており、欧米からの観光客に近づいている。外国人観光客は、バリ人が考える以上に、観光用に作られたイメージではなく、バリ島固有の観光資源や伝統文化に深い関心を示しているのだ。

4.2 観光開発の影響について

サヌールやクタといったビーチリゾートには、沿道にはお土産店やレストラン、カフェなどの店舗が立ち並び、観光客を呼び込んでいる。スミニャックやウブドといった比較的新しく開発された地域も観光客の人気を集め、ホテルやレストラン、ショップなどが多く立ち並び観光客でにぎわっている。先述のように、ホテル、ヴィラやゲストハウスがどんどん建設され、供給過剰の状態である。クタのビーチ沿いのメインストリートは観光客でいつもにぎわうとともに、交通渋滞に悩まされる。21 世紀に入り、バリ島にはクタを中心に大型ショッピングセンターが多数建設されている。このようにバリ島南部のリゾート地は、世界のどの有名リゾートと比して勝るとも劣らない賑わいを見せている。

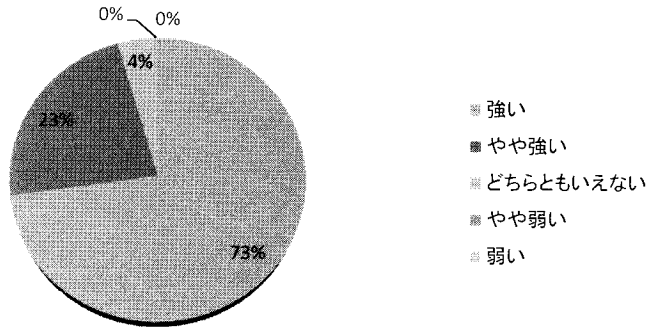
図表 5　バリ島の観光開発の影響

	項目
1	観光客の増加により、バリ人の所得水準が上がった
2	観光産業により、雇用が増加し、就職の機会が増えた
3	観光化によりインフラが整備されて、生活水準が向上した
4	観光客の増加により、多様な価値観がもたらされた
5	バリ島が世界的に有名なリゾートになり、誇りに感じる
6	観光産業への就業のため、外国語を学ぶ人が増えた
7	観光化により、伝統芸能がよりよく進化した
8	観光化により、伝統芸能が観光客用になり、本来の姿を失いつつある
9	ホテル等の増加により、田園風景などが失われつつある
10	観光客の増加にともない、ゴミなどが増え、環境が悪化した
11	観光客の増加にともない、渋滞が増えて日常生活に影響がある
12	異質な文化の流入により、バリの良さが失われている
13	欧米文化の流入により、若者の欧米化が進んでいる

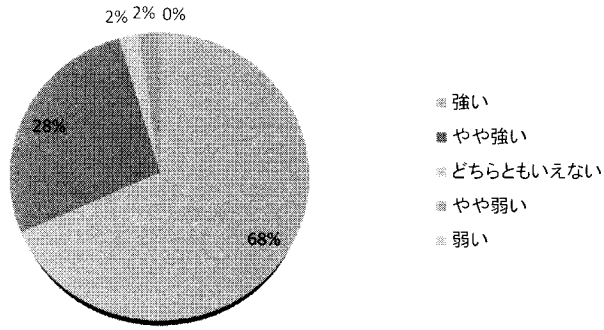
出典）アンケート調査より作成

アンケート調査の結果、強いまたはやや強いとの回答が多かったのは、「バリ島が世界的に有名なリゾートになり、誇りに感じる」（100％）、「観光産業への就業のため、外国語を学ぶ人が増えた」（97.7％）、「欧米文化の流入により、若者の欧米化が進んでいる」（93.2％）、「ホテル等の増加により、田園風景などが失われつつある」（90.9％）、「観光客の増加にともない、渋滞が増えて日常生活に影響がある」（90.9％）であった。一方、強いまたはやや強いとの回答が少ないのは、「異質な文化の流入により、バリの良さが失われている」（63.6％）、「観光化により、伝統芸能が観光客用になり、本来の姿を失いつつある」（68.2％）、「観光化により、伝統芸能がよりよく進化した」（77.3％）、

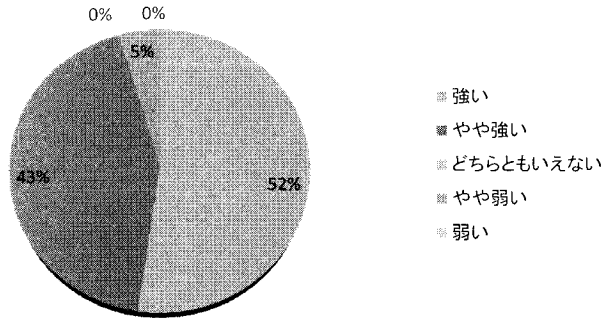
図表６　伝統舞踊などは、観光用と宗教儀式用は明確に区分すべきである



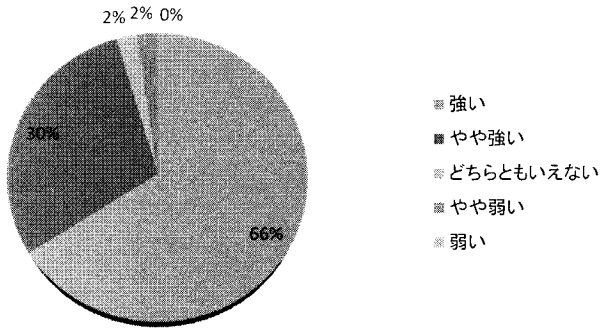
図表７　若い世代がバリの伝統芸能を受け継ぐ責任があり、私も受け継ぐつもりだ



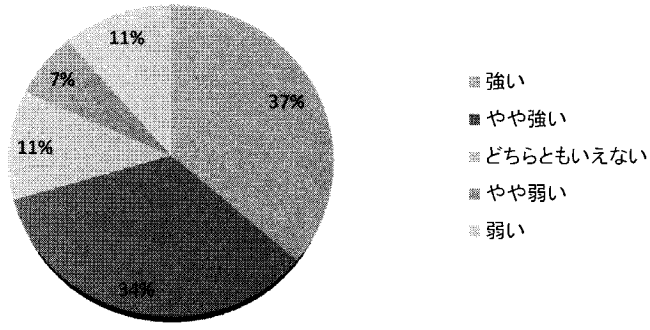
図表８　バリ人である以上、伝統芸能のパフォーマンスが出来るとことは当然である



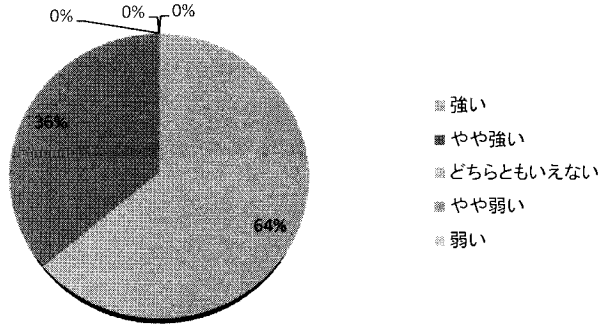
図表 9　私は宗教行事には自ら進んで参加している



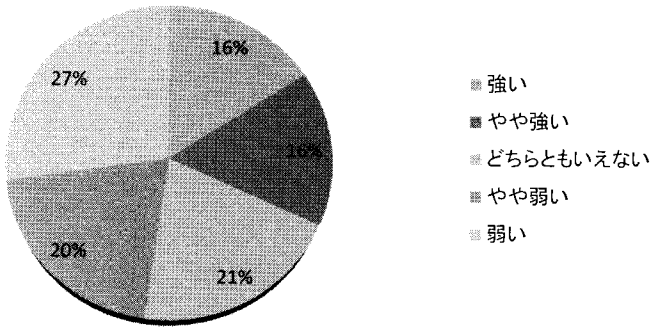
図表 10　観光化が進めば、バリの伝統は失われると思う



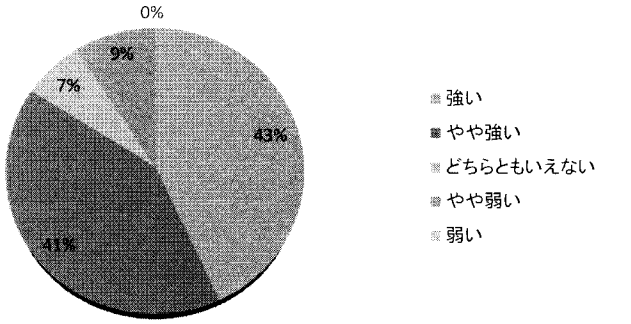
図表 11　若い人はバリの伝統的習慣は守るべきである



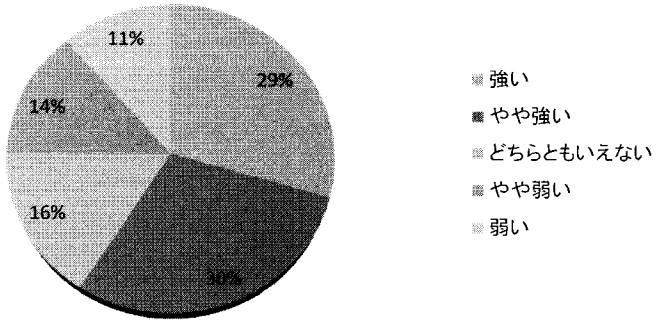
図表 12　バリにおける社会・人間関係は窮屈だと感じることがある



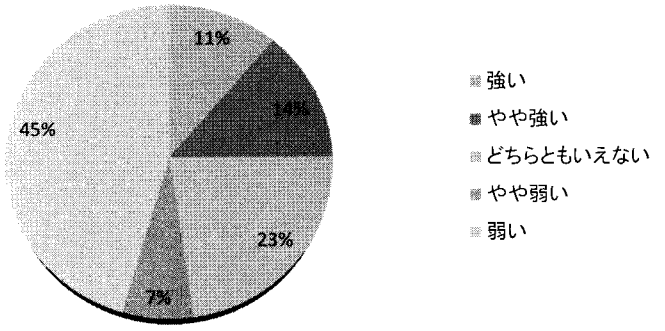
図表 13　これからもバリの伝統的生活様式は続くと思う



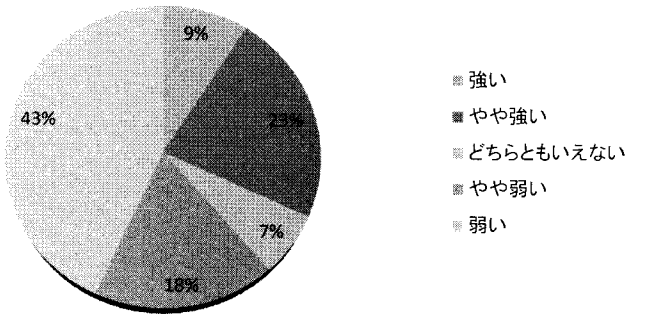
図表 14　伝統的な農村生活ではなく、観光産業で働きたい（働いている）



図表 15　バリから外に出て働いてみたいと思う



図表 16　私は欧米的なライフスタイルにあこがれる



「観光化によりインフラが整備されて、生活水準が向上した」（79.5％）であり、その他の設問についてはいずれも 80％台であった。

この結果を見ると、観光開発と観光客の増加は、バリ島の環境に少なからず悪い影響を与えているが、観光開発により、所得は向上し、若者の欧米化など、多様な文化の受け入れを促進した。

観光開発と持続可能性という観点では、バリ島のいくつかの地域では両立している。伝統芸能で有名な静かでリラックスでき、近年観光客に大人気の街ウブドの場合、持続可能性と経済発展は実に見事に両立している。ウブドでは絵画、工芸品の店やギャラリーと地元の商品が沿道を支配している。海外のフランチャイズチェーンの出店や過剰に商業的な開発を制限することにより、地元の経済や人々が生き残ることを可能にしているのだ。[14]

[14] "Tourism tales from Bali: Growth and sustainability" The Jakarta Post, June 15, 2013

例えば、バリ島の南西部に位置するタバナン県では、地方行政府が観光開発に対して厳しい基準を設けている。この地域でホテル開発をしようとするならば、認可を得るためには、厳しい環境と持続可能性の条件を満たす必要がある。この条件には、現地の従業員を雇用し教育することや、開発面積の3分の2を森林や棚田として残すといった環境保護条項を含み、生き残るために農地を必要とする田舎の農民と協力しなければならない。決して開発を侵略者として締め出すのではなく、開発に思慮深いアプローチを求めるものである。 経済的成長のみを考えた乱開発は、結局バリ島の魅力的な観光資源を破壊し、観光地としての魅力を損なう結果となる。持続可能な開発と経済的成長とは共存しうるのだ。

一方で、文化的な側面では、異質な文化が流入しても、バリ島の良さはそれほど失われていないと考えているようだ。観光化が進んでも、バリ島本来の暮らしや風景が多く残されているのがバリ島の観光地としての魅力である。世界的リゾートに住むバリ人たちは、観光地としての誇りを持ちつつ、そのことをよく理解しているようである。

4.3 バリ人の価値観・考え方

バリ島の人々は、ほとんどが伝統舞踊などは、観光用と宗教儀式用に区分すべきであると考えており、また、若い世代がバリの伝統芸能を受け継ぐ責任があると考えている(図表6、図表7参照)。バリ島の学校においては、放課後にガムラン、レゴンダンス、バロンダンスなどの伝統芸能を練習する活動をおこなっており、また、子どものころから芸能スカ（seka）に参加して宗教儀式でパフォーマンスをすることも多い。バリ人は芸能パフォーマンスができることは当然ととらえており、図表8のように、95%がバリ人である以上伝統芸能のパフォーマンスができることは当然だと考えている。

図表9が示すように、「あなたは宗教行事には自ら進んで参加していますか」という質問に関しても、強い（66%）、やや強い（30%）と多くの若者が、積極的に宗教行事に参加していることがわかる。「観光化が進めば、バリの伝統が失われるか」という質問に対しては、どちらともいえない（11%）、やや弱い（7%）、弱い（11%）と消極的な意見も多く見られ、意見が分かれるところであった。「若い人はバリの伝統を守るべきである」という質問に対しては、全員が強い、またはやや強いと回答している。若者が観光化したバリにおいて、これからもバリ島の習慣（adat）を守り、伝統芸能を継承していくべきだという強い意志が感じられる結果となった（図表11）。

図表12、13によれば、バリ島における社会・人間関係を窮屈だと感じる人は約3分の1におよぶが、バリ島の伝統的生活様式は今後も変わらないだろうと考えているようだ。約6割は伝統的な農村生活ではなく、観光産業で働いているか、働きたいと回答しているが（図表14)、バリから外に出て働いてみたいという回答はわずかに4分の1であった（図表15)。また、「欧米の生活スタイルにあこがれるか」という質問に対しては、あこがれると答えたのは3分の1で、6割

があこがれはないと答えている（図表 16）。

以上の結果から、バリ島の若者は観光産業で働きたいという気持ちは強いが、仕事を離れれば、バリ島の伝統的な生活様式に身を置くことを心地よく感じているようである。

おわりに

本論文では、バリ島の観光開発とバリ人の生活や伝統文化への影響について調査、考察した。アンケート調査で回収できたのは、わずか 44 件と少ないため、統計的な手法を用いて分析することができず、単純集計にとどまった。今後はさらに大規模な調査を実施したい。しかし、今回のアンケート結果やバリの人々への聞き取り調査の結果から、バリ人の観光開発とバリ島の伝統文化や伝統的な暮らしについての考え方を読み取ることができた。

バリ島においては、大規模な観光開発により、いわゆる貧困層は大幅に減少した。バリ島は世界的なリゾート地となり、国内外から多くの観光客を引き寄せている。当然開発に伴う代償もないわけではない。棚田の景観はホテル建設のために失われ、ビーチ沿いの道路では常に渋滞に悩まされる。しかし、現在バリ島の観光開発は持続可能な開発として、環境保全と両立しているケースが多い。

マッキーン（1991）は、観光者の来訪により引き起こされる大きな文化的変容について、普通用いられる仮説は、①変化がもたらされるのは外部からの、たいていは優越する社会文化システムが、ある弱体な受け身の文化を侵略する、②変化は一般的にいって、土着文化に対して破壊的である、③変化が導く方向は、民族や地域のアイデンティティを包み込んだ均質的な文化への移行であるとしたうえで、バリ島では観光により社会経済的変化が発生しているとしても、それは伝統文化と手を取り合って進んでおり、伝統を保存し、改革し、そして再創造する過程を強化するものだとしている。

本論文の調査においても、バリの人々は、経済的には観光産業に従事することを望み、観光化が進めばバリ島の伝統が失われることに危機感を抱いているものの、バリ島の伝統的な社会様式や人間関係の中で暮らしていくことを望み、伝統芸能を保全し、次世代へ受け継いでいくであろうことがわかった。本来宗教行事であった伝統芸能は、海外公演等を行うことにより重要な観光資源となり、観光客用に演じられることにより創意・工夫がなされ、宗教行事用にもフィードバックされるなど、観光が伝統文化の発展にも寄与している。国際的な観光地となったバリ島において、バンジャール（Banjar）は生活の中心として重要な共同体として機能し、バリの人々は伝統的慣習であるアダット（adat）を生活の中心にして暮らしているのだ。

参考文献

1) 佐伯奈津子他（2013）『現代インドネシアを知るための 60 章』明石書店
2) 山下晋司（2001）『観光人類学』新曜社
3) フィリップ・フリック・マッキーン（1991）「観光活動の理論的分析を目指して－バリ島にみる経済の二元構造と文化的包摂」バレーン・L・スミス『観光・リゾート開発の人類学』勁草書房
4) 間苧谷榮（2005）「バリ島における観光業と寺院システム」『国際関係紀要』第 15 巻 1 号、亜細亜大学
5) 玉置（2001）「持続可能な観光開発－リゾート開発の光と影－」山下編『観光人類学』所収
6) 間苧谷榮（1991）「バリにおける観光業と伝統的舞踊」『国際関係紀要』第 1 巻 1 号、亜細亜大学
7) 中野麻衣子（2002）「バリ島村落社会における芸能集団の組織化とその実践 ： アダットとビスニスを中心に」『哲学』107 集、慶應義塾大学
8) 永野由紀子（2007）「インドネシア・バリ島におけるグローバル・ツーリズム下での移住者の増加と伝統的生活様式の解体」『山形大学紀要（社会科学）』第 14 巻 2 号
9) Vickers, Adrian. (1989) “Bali: A Paradise Created.” Australia: Penguin Books
10) “Bali attracts 3.27 million foreign tourists in 2013” January 24, 2014
11) “Bali targets $5.5b in tourism revenues” The Jakarta Post, January 08, 2014
12) “High time to look beyond Bali for tourism opportunities” The Jakarta Post, September 28, 2013
13) “Hotels, restaurants contribute 30% to Bali” The Jakarta Post, August 12, 2013
14) “Tourism tales from Bali: Growth and sustainability” The Jakarta Post, June 15, 2013
15) “Bali has too many hotel rooms” The Jakarta Post, August 27, 2010
16) “Bali Dalam Angka” 2010-2014, BPS-Statistics of Bali province
17) Bali Government Tourism Office Homepage, http://www.disparda.baliprov.go.id/

A Study of the impact on the traditional society by tourism development in Bali

Hirokazu Adachi

Abstract

"A magical paradise" – Bali Island attracts a large number of tourists from both overseas and domestic market. It is attractive not only for its typical resort image but also because of its traditional culture based on Balinese Hinduism. Many tourists have been fascinated with "The Island of the gods". While tourism development advances and some environmental problems occur, the Balinese people enjoy the reputation as a prominent tourist destination. Moreover, tourism and vibrant culture are interacting harmoniously in order to develop Balinese society.

This paper aims to explore how tourism development concerns Balinese society and how the traditional values of Balinese culture changed in recent years.